主日礼拝１０月２３日（日）
題　「 偽教師について (2)」
テキスト：ペトロの手紙Ⅱ　２章１０b 節～22 節

皆さん、おはようございます。

先日、近所の家の庭に酔芙蓉の花がきれいに咲いていました。わたしは初めて見る花で手入れをされている方にお尋ねすると、朝は花は色白、だんだんピンクになり、赤になる。酔っているような色なので、酔芙蓉と呼ばれると教えてくださいました。一日だけの花とか。花は語らずとも人生を教えてくれているように感じています。
さて、先週は教会創立１１９周年を共に捧げることが出来て感謝でした。また、その後、敬老感謝会を短い時間でしたが楽しく和やかにできて感謝します。ご奉仕くださった方々、ご参加くださった方々に感謝しています。
女性会がご用意くださったお菓子もご招待者で来れなかった方々にお渡しできたことを感謝しています。
ところで、教会の礼拝ではペトロの手紙Ⅱを継続的に学んでいますが、新約聖書の中でも、直接的に生き方、道徳的な生き方を表現している言葉が多いと昔から思ってきました。ちょっと厳しい言葉があると思う気持ちもありますが、それだけ心に残る言葉もあります。今日の個所にもあります。

今日は２章の１０節後半からです。
「彼らは、厚かましく、わがままで、栄光ある者たちをそしってはばかりません。」彼らとは、信徒を惑わすイエスを主・キリストと認めない、偽教師と呼ばれる人たちのことだと思われます。
彼らは、イエスをキリスト・主と信じる人々を、そしる者たちとみなされています。加えて、
「 11:天使たちは、力も権能もはるかにまさっているにもかかわらず、主の御前で彼らをそしったり訴え出たりはしません。」
ここで「天使」たちという言葉が心に引っ掛かりました。本来、天使は神に仕える者です。実は悪いと思われていた天使たちもいたようです。サタンももとは天上にいた天使だとも言われます。地上に堕ちて堕落したと受けとめられています。

今日の個所には、かなり否定的な言葉が多用されていて、読んでいて心が痛

くなる感じがします。しかし信仰者としての成長のためには聞きにくい言葉も時には避けてはならないのだとも思います。

「12:この者たちは、捕らえられ、殺されるために生まれてきた理性のない動物と同じで、知りもしないことをそしるのです。そういった動物が滅びるように、彼らも滅んでしまいます。」

「殺されるために生まれてきた理性のない動物」とは、動物好きな人には、耐えられないことばかもしれません。動物が人を慰めてくれることも、助けてくれることもあります。人から大切にされない野生に生きている動物は気性も激しくなるのかもしれませんし、それはわたしたち人間も同じではないかと思います。本能のままでに生きてしまうのです。また古代は現代のようには広く動物愛護の取り組みは普及していなかったと思われます。

13:不義を行う者は、不義にふさわしい報いを受けます。彼らは、昼間から享楽にふけるのを楽しみにしています。彼らは汚れやきずのようなもので、あなたがたと宴席に連なるとき、はめを外して騒ぎます。

14:その目は絶えず姦通の相手を求め、飽くことなく罪を重ねています。彼らは心の定まらない人々を誘惑し、その心は強欲におぼれ、呪いの子になっています。

昔から目が一番罪を犯しやすいと言われています。人間は手や足はコントロールできても、目をコントロールすることは難しいと言われます。見なくてよいものでも、つい見てしまうことがあるのものです。ヨハネによる福音書９章４１節（Ｐ186）には、イエスが生まれつき目の見えない人を見えるように癒された時、イエスを敵対視していた当時の宗教的権力者であったイエスに不満を持つファリサイ派の人々に対して「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だからあなたたちの罪は残る。」と言われています。

イエスは肉眼の目ではなく、心の目でみることの大切さを語っておられるのだと受けとます。

15:彼らは、正しい道から離れてさまよい歩き、ボソルの子バラムが歩んだ道をたどったのです。バラムは不義のもうけを好み、

16:それで、その過ちに対するとがめを受けました。ものを言えないろばが人間の声で話して、この預言者の常軌を逸した行いをやめさせたのです。

この話は、旧約聖書の民数記２２章にある出来事で、バラムという預言者がモ

アブの王さまバラクの誘いにのって欲望に目がくらんで神の民であるイスラエルをのろうという王の要求にしだいに応ずるようになって行く中で、神は物いわぬろばの口を通して正したのです。これは神のなされたことだと記されています。偽教師は、一見正しいことを口にしながら神に逆らっていることを戒めているのです。人を教える側の者は心しないといけないのだと戒められます。
17:この者たちは、干上がった泉、嵐に吹き払われる霧であって、彼らには深い暗闇が用意されているのです。「干上がった泉、」とは「役に立たない。人を活かさない。」こと。「嵐に吹き払われる霧」とは、定まるところがない、いずれ消え去り、彼らには深い暗闇が用意されているのです。義なる神の裁きが待っているということが言われます。それゆえ人は、誰でも繰り返し繰り返し、悔いる心をもって、神に立ち帰ることが大切なのだと思わされるのです。

偽教師への批判は、続きます。
18:彼らは、無意味な大言壮語をします。また、迷いの生活からやっと
抜け出て来た人たちを、肉の欲やみだらな楽しみで誘惑するのです。
人を誘惑していく。悪い道へ引き込もうとする力は現実にある力です。
19:その人たちに自由を与えると約束しながら、自分自身は滅亡の奴隷
です。人は、自分を打ち負かした者に服従するものです。
　今回わたしは「人は、自分を打ち負かした者に服従するものです。」という言葉は、強く心に響きました。歴史において権力者たちは、この言葉を持って、己の力を増すために権力を振るって来た歴史もあるように思えます。
意味深長なことばです。
でも、支配される人々の側にも考えなければ、改めなければならないこともあるのではないかと思えます。「隷従」ということばがあります。神によって造られ与えられた人間としての正しい誇りや尊厳さを失い、いや、自ら捨てるかのように、奴隷のように支配している力に従って行くのです。それが「隷従」です。ある研究者は最近出された本の中で、アメリカと戦って完膚なきまでに破れた日本は、戦後アメリカに隷従して来た、と書いているようです。日本にある多くの米軍基地も、密約などで日本の方から頼んだのだとか。真意が問われるところです。
　まことの神を知らず、また忘れると、個人でも、組織でも、国家でも、強い国を頼り、支配下に入ってしまいやすいのではないかとも思います。しかし、その道はいざという時、裏切られることもあり危ういのだと思います。一人ひとりが神に祈り、考え、行わないといけないのだと思うのです。

最後に大切なことばを共に覚えたいのです。

「20:わたしたちの主、救い主イエス・キリストを深く知って世の汚れから逃れても、それに再び巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような者たちの後の状態は、前よりずっと悪くなります。」と。

イエスを自分の主と受け入れた者たちは、たとえ小さく、弱く、力がないように見えても、「主、救い主イエス・キリストを深く知って世の汚れから逃れている」者たちだということです。ここにキリスト者の尊厳があるのです。これは神さまの愛による尊厳であり、イエスの十字架の死により復活の力に支えられている尊厳なのです。この尊厳さは誰からも奪われることはない、決して失われることはないのですし、失ってはならないのです。たとえ私たちが弱く、暗い世の汚れの中にいてもです。

しかし、キリストから離れて、「それに再び巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような者たちの後の状態は、前よりずっと悪くなります。」
イエスにつながることが心と魂にとっては一番大切なことなのです。
そうすれば必ず個人も家族も、社会も教会も平和の実を結べるのだと信じるのです。

これからも小さくても、弱くてもイエス・キリストにしっかりとつながる枝として、キリストの群れ、教会として互いに励まし合いながら歩みたいと願います。

主の平安を祈ります。